

コレクション紹介
佐藤國男氏昆虫コレクション
諏訪哲夫

2016年、北海道からドイツ型標本箱150箱に入った昆虫標本がミュージアムに送られてきた。送り主は札幌に在住の佐藤國男さんである。彼とは大学生の時から友人であるが、私と同じ町内に住んでいた故石川由三さんが彼と蝶の交換をすでにやっており、高校生の時からお名前は聞いていた。学生の時には大雪山と一緒に採集に行き、奄美大島、沖縄西表島などにも遠征したチョウ友達である。

卒業後は北海道庁で農業・畜産分野で活躍し、現在は札幌市円山動物園でガイドボランティア、北大博物館でかの有名な松村松年の昆虫標本の整理などを行っている。

彼の標本の寄贈先として北大の博物館という選択もあったが、収蔵スペースや今後の標本整理の対応など静岡のミュージアムは開館して間もないのですべてに余裕があったため、静岡に寄贈していただけることになった。

寄贈された標本はチョウがドイツ箱150箱、7735頭と甲虫のオオルリオサムシ、アイヌキンオサムシなどが約100頭である。彼は几帳面な性格でラベルは丁寧で美しく、外国産の個体には学名もつけられている。また、展翅の技術が素晴らしい。

彼は、永年北海道に住んでいたこともあって、熱帯の蝶をはじめ、モンゴルなどにも強いあこがれと種群の個体変異に対して関心を持っていた。社会人になってから台湾、ボルネオ、スラウェシ、ニューギニア、モンゴル、ロシアなどに採集に出かけた。

彼の標本を見ると日本産と外国産がおよそ半分ずつである。日本産では学生時代に北大の昆虫学教室の渡辺千尚教授に大雪山のウスバキチョウの採集許可をお願いして採集した、私にとっても懐かしい標本をはじめ、北海道特産種



ナガサキアゲハグループ（左）とツマベニチョウグループ（右）の標本

の標本が多い。外国産標本は数多く採集に行ったモンゴルの標本が多いが、目を引くのはナガサキアゲハグループとツマベニチョウグループのコレクションであろう。

ナガサキアゲハは東南アジアに広く分布し、分布の北限は日本であるが、近年、分布が拡大し2000年ごろから静岡県でも見られるようになったチョウである。現在世界に13の亜種が知られており、それぞれの亜種の中でも特にメスの変異は顕著で、尾状突起（後翅の突起）のある型、無い型、斑紋の変異などさまざまである。これらの型の多くはベイツ型擬態と深く関係している。また、ナガサキアゲハとは別種となるフィリピンのアカネアゲハやパラワン島に生息するパラワンアゲハなどのように孤立した島で特産種として種分化している種も数種類あって極めて興味深い種群である。

また、ツマベニチョウグループも東南アジアに広く分布し、北限は鹿児島県南部である。シロチョウ科の中では最大で、翅の表面の地色は基本的には白色、前翅の先端に大きな橙色の部分があって大変美しい。様々な島で、翅の形、橙色部分の大きさ、白色の地色が黄色に変化した型など変異が顕著で、30を超える亜種が知られている。

彼の標本は上記の2グループの標本が特に充実しており圧巻である。孤立した島嶼での種分化と擬態の奥深さを知るうえで大変参考になる標本である。